

知的障害特殊学級における作業活動を中心とした生活単元学習の実践的検討

岐阜大学教育学部障害児教育講座 坂本 裕
 各務原市立那加第二小学校 熊崎 のぞみ
 岐阜県立大垣養護学校 日比 小百合

はじめに

わが国の特殊学級における知的障害児教育は、吉田昌義(1994)や渡辺健治(1997)によると、養護学校義務化が実施された1980年代以降、保護者の「通常の学級志向」傾向による在籍数・学級数の減少や、「拠点校方式から居住地校方式への転換」による多校設置、「ミニ養護学校化」と称されるような障害の重度・重複化など、多様な状況にあったとされている。しかし、太田俊己(2001b)や柘植雅義(2001)は、1990年代後半になると、在籍数・学級数は増加に転じており、保護者の「特別な教育の選択」傾向の顕在化が指摘されるなど、その様相に変化が見られ始めたとしている。こうした特殊学級に在籍する児童数の増加の要因について、小塩允護(2002)は知的障害としての対応の必要性が理解されてきたことや、これらの学級・学校における知的障害児教育の妥当性が保護者を含めた関係者から評価されてきたことを反映しているとの分析を行っている。

このようにその評価が高まっている知的障害児教育の教育方法について、太田俊己(2001a)はわが国の知的障害児教育において独自の学習形態を戦後一貫して展開してきた子どもたちの興味関心や生活を重視する生活中心教育がその中核であるとし、更なる推進を提言している。この生活中心教育とは、いわゆる「合わせた指導」である「生活単元学習」「作業学習」「日常生活の指導」「遊びの指導」といった養護学校や特殊学級で幅広く行われている教育活動である。

この生活中心教育について、小出 進(1993)は「学校生活が充実・発展するように学校生活

を整え、子どもの学校生活への取り組みを適切に援助する」といった教育観が重要であるとしている。そして、子どもたちが主体的に活動に取り組めるようになる支援的対応を重視し、「年間の単元計画」「週日課の組み方」「単元計画」「場の設定」「活動の選択」「遊び場の作り方」「遊具の工夫」「製品の選び方・作り方」「工程の分け方・組み方」「展開の流し方」「仕事の流し方」「道具・補助具の工夫」「班やグループの組み方」「個々の様子とねがい・手だての立て方」「ともに取り組みながらの教師の支援」からの詳細な検討が必要とされている(千葉大学教育学部附属養護学校,2002)。これらの検討事項において、その中心的な命題となるのが「できる状況づくり」である。この「できる状況づくり」について小出 進(1993)は「精一杯取り組める状況、首尾よく成し遂げられる状況」としている。このことは、『この子どもは知的発達に障害があるために、「できない子ども」と言われがち子どもたちである。しかし、その子どもたちを「できない子ども」と見るのではなく、「できない状況に置かれがちな子ども」と見たい』といった障害観に基づくものである。そして、実際の授業づくりにおいても『できる状況に置かれればできる姿を示す子どもたち一人ひとりに合った「できる状況づくり』が最も重要な課題とされている。

本研究においては、こうした知的障害児教育の動向を踏まえ、知的障害特殊学級の教育課程の中心である生活単元学習における、子どもたちが主体的に活動に取り組めるような授業づくりのあり方について検討を加えていくことにした。特に今回は作業活動を中心に位置づけた生活単元学習を取り上げ、「週日課の組み方」、

「単元計画」, 「場の設定」, 「活動の選択」, 「製品の選び方・作り方」, 「工程の分け方・組み方」, 「展開の流し方」, 「仕事の流し方」, 「道具・補助具の工夫」, 「ともに取り組みながらの教師の支援」について検討をし, 子ども主体の教育活動のあり方について考えてみたい。

方 法

1 対象校・学級

岐阜小学校養護学級3組を対象学級にした。養護学級は「自分で活動, 自分の周囲や環境や人を, 自分なりに理解し, 自分なりに思いやりや願いを發揮して, 友だちや教師とともに精一杯活動する児童」を願う児童の姿として, 仲間とともに活動していく中で生まれてくる生活課題を生活単元学習で取り上げ, 実践的, 総合的, 継続的に学習させることにより, 児童一人ひとりが豊かな生活を創りだすことができることを大切にしている学級である。

この養護学級3組は, 5年生4名(男2人, 女2人), 6年生2名(男1人, 女1人)の学級で, 学校生活にある程度の見通しをもちながら, 自分なりに進んで取り組む姿や, 仲間を意識して意欲的に活動する姿が随所にみられる学級である。

事前の活動としては, 1学期に単元「トマトを植えてみんなにプレゼントしよう」に取り組んだ。分担作業を行い, 自分の任された作業に精一杯取り組み, 互いに声をかけあいがんばる姿がみられた。また, 通常の学級の子どもたちにトマトの苗をプレゼントして, そのかわりをとても楽しみにし, 喜んでもらおうとする姿も見られた。そして, 養護学級の友だちと一緒に合宿で遊ぶためペットボトル製ボートを作り上げる単元「ボートをつくろう」においても, それぞれに自分の担当した作業にはりきって取り組む姿や集中して取り組む姿, 自分の仕事が終わると進んで友だちの仕事を手伝う姿などがみられた。

2 対象単元 (授業)

本単元「お花プレゼント大作戦」は, x年1学期に行った単元「ボートをつくろう」で小学

校全校や中学校養護学級から集めたペットボトルを花鉢に改造して花苗を植え, ペットボトルをくださった方々にプレゼントをする活動を中心とした単元である。

3 検討期間・方法

x年9月から11月に, 作業活動を中心とした種々の活動を生活全体で展開していく中で, 週日課の組み方や単元構成, 授業展開, さらに, 教材・教具, 作業工程, 作業量などがいわゆる子どもたちが主体的に取り組めるような「できる状況づくり」となっていたか検討を加える。

結果と考察

1 週日課の組み方

単元中の週日課を図1に示したが, 本単元の中心的活動である花鉢づくりや交流活動を午前中にまた, それにかかわる活動をその前後に配することで, 子どもたちが見通しをもって自分から取り組めるように考えた。

太田俊己(2002a)は, 子どもの1日・1週間の学校生活を組み立てるうえで大切にすることは, 実際の活動を生活の中心に据え, 1日の流れに軸を設けると同時に, 1日の流れをおよそ一定にし, 子どもが目当て・見通しをもって, 自ら取り組みやすい生活にすることであるとしている。そのため, 単元期間中は, 午前の主要な時間帯には主となる活動に存分に取り組めるよう日課を整え, それ以外でも, 単元に関連する活動に取り組むなどして, 毎日が満足で, 明日を心待ちにできる帯状の日課を組んでいった。

	月	火	水	木	金
1	朝の会 (お知らせ・ペットボトル回収・シール貼り)				
2	生活単元学習 「お花プレゼント大作戦」			パソコン (シール作り)	
3	体 育				
4	給 食 準 備				
給食の時間	給食・お昼の放送・掃除・プレゼントタイム				
5	国語・算数 図工	パソコン	英 語	国語・算数 図工	音 楽
放課後	ペットボトルの切断・合体				

図1 「お花プレゼント大作戦」期間中の週日課

表1 単元「お花プレゼント大作戦」の単元計画（経過概要）

月 日	曜	活 動 内 容		
		主 となる 活 動		関 連 する 活 動
		花鉢づくり活動	花鉢渡し活動	
9/25	水			手紙書き
26	木			お知らせ（教室回り・集会・不足依頼） シール作り
27	金	ペットボトルカッターの使用確認		ペットボトルの回収・準備
30	月			
10/1	火	花苗づくりの説明（農学部矢野先生）		お昼の放送 シール作り
2	水			
3	木	花苗づくり 3-1分		
4	金			
7	月			
8	火	3-1分	シール貼り、	
9	水	4-1分	プレゼントタイム	
10	木	3-2分	3-1	
11	金	3-3分	3-2	
12	土		4-1, 3-3	養護1, 2組へのプレゼントの用意
15	火	2-1, 4-3分		花苗づくり確認掲示用紙花作り
16	水	2-3分	2-1, 4-3	
17	木	ペットボトル切り	2-3	花苗ポッド入れの絵描き、先生招待の手紙書き
18	金	4-2分		シール作り
20	日	2-2分	4-2, 2-2	
22	火	来客分		
24	木	中学校養護分		
25	金	1-3分		
28	月		1-3, 中養	
29	火	5-1分		
30	水	5-2分	5-1	
31	木	5-3分	5-2	肥料詰め
11/1	金	6-1分	5-3	
12	火	実習生 6-2分	実習生	
13	水	6-3, 1-2分	6-1, 6-2	
14	木	1-1分	1-2, 6-3	
18	月		1-1	お花プレゼント大作戦！成功パーティー

そうすることで、主となる花鉢づくりの活動での主体的な取り組みの様子はもちろんのこと、毎日活動を積み重ねることで見通しをもち、朝のお知らせやお昼の放送に自分から進んで取り組む姿や、放課後の活動の準備を自らして作業に取りかかる姿など、充実した1日、そして1週間を展開できた。

2 単元計画

単元計画（経過概要）は表1に示したように、活動内容を花鉢づくりと、それにかかわる活動で構成した。主となる花鉢づくりは800鉢を目標とすることで毎日安定した活動となるようにした。また、花鉢渡しの交流活動を織り込むこ

とでその活動内容に広がりをもたせ、子どもたちが見通しをもちやすくした。さらに、関連する活動として、交流学級を訪問してのお知らせや、お昼の放送などの活動も行うことで生活全体をまとまりのあるものとするようにした。

こうした単元計画を設定することで、花鉢づくりの取り組みの中で、毎日の繰り返しの活動から見通しをもって、自分から仲間にかかわっていく姿や、交流活動でプレゼントする友だちのためにと最後までがんばる姿、お昼の放送のためにと一生懸命給食を食べて教室を走り出ていく子どもたちの姿などが見られた。このことから、単元活動を子どもたちの生活全体に広げ

て、毎日繰り返し取り組んでいくことで、子どもたちが見通しをもって存分に活動できる、分かりやすくまとまりのある生活づくりにつながったと思われた。

3 場の設定

見通しをもちやすくするために常設のテントの中に作業場を設け、子どもたちができる限り天候に関係なく毎日同じ活動ができるようにした。そして、自分の活動場や作業工程全体の流れを分かりやすくするために、図2のようにそれぞれの作業の位置や道具や資材の位置を固定した。

また、子どもたちが互いの活動の様子を見て声をかけあって、励まし合い、認め合えるような机の配置にした。さらに、その日の作業量の確認と次回への見通しをもてるように、完成した花鉢を自分の仕事の終わった人から教室の前まで運び、そこでみんなで水やりをした。

太田俊己(2002b)は、仲間とともに取り組める、子どもが活動しやすい場の設定も「できる状況づくり」の手立ての1つとして挙げている。本單元においても互いの取り組みの様子がよく見え、一人ひとりの活動場を設定し活動しやすい場の設定にすることで、仲間とのかかわりがもちやすく、とくに高澤さんの仲間へ声をかける姿がよく見られた。

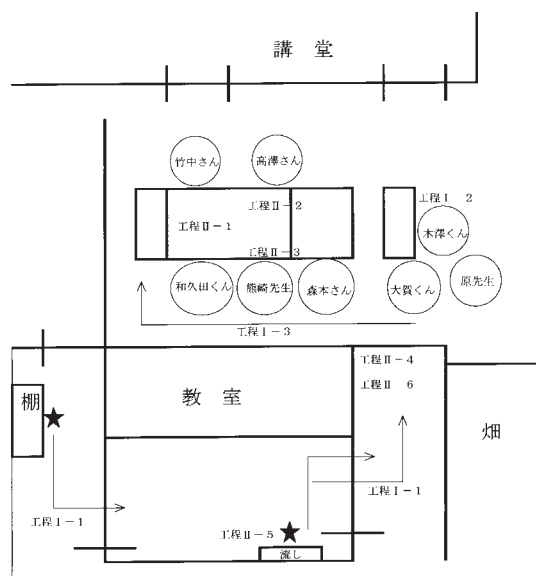


図2 單元「お花プレゼント大作戦」の作業配置図

4 製品の選び方・作り方

① 花鉢

1学期に取り組んだ單元「ボートをつくろう」で用いたペットボトルを花鉢として活用できないかと考えた。ペットボトルは耐水性に優れ、大きさや形も半分に切断して組み合わせると、花鉢に改造できないかと考えた。しかし、育苗の点からいくつかの疑問も生じたため、岐阜大学農学部附属農場(植物生産部門)から以下の2点について助言を受けた。

・水はけや通気性はどうか。

→内側のペットボトルを外せば、水を捨てることはできる。また、ガーゼや特殊なひもで底に溜まった水を循環させる方法もある。2つに切断したペットボトルを縦横入れ違いにして組み立てる。または、針金で留めて浮くようにしてはどうか。

・実際に使用する土を入れたときペットボトルの口から漏れないか。

→実際にその場でやってみたが、いろいろの種類が混ざってあるため、細かい砂が時々少量こぼれるだけで、大丈夫である。

また、前年度の取り組みで用いた牛乳パック製のポッドでは、苗がある程度大きくなったら植え替えを必要とした(熊崎のぞみ・坂本 裕・杉山貴子, 2003)。しかし、ペットボトル製のポッドの場合は苗の植え替えをしなくてもよい大きさであるとの助言もいただき、ペットボトルを花鉢として用いることに決定した。

そして、ペットボトルをいろいろな位置で切つて、縦横入れ違いや浮かせたような花鉢の試作品を作った。その結果、上から11cmの部分で切断し、子どもの力でもはめられるよう縦横をそのままにして、上部を逆さにして下部にはめ込むようにした。ただし、1学期に行った單元「ボートをつくろう」で用いたペットボトルのみでは個数が足りないと思われ、全校にペットボトル回収の呼びかけをすることとなった。そこで、いろいろの形や種類のペットボトルで試してみたところ、丸いペットボトルではうまくはめることができないため、花鉢の形を揃えるためにも、四角い2リットルのペットボトルのみ使用することにした。

② 花苗

前年度扱ったと同様にナデシコを使用することにした。このナデシコは、

- 四季咲性の強い品種のため同年栽培が可能であり、花壇・鉢・苗物など用途が広い。
- 冬に向かって次第に寒くなる時期でも耐寒性に優れており丈夫である。霜が降りなければ確実に育つ。
- 必要な肥料が少なく済む。
- 紅、鯨肉、赤、白、桃とその中間色や複色を含む非常に多くの種類があり、きれいな色の花が咲く。それぞれの花は色が咲くまでわからないので、子どもたちにとって楽しみである。
- ひとつの苗にたくさんの花がつく。
- 種をまいて、移植しプレゼントするまでの管理・栽培が容易である。

といった性質の花であり、扱いが容易である利点がある。

また、前年度も採用しているため、養護学級の子どもたちにとっても、プレゼントされる子どもたちにとっても馴染みがあり、花が咲くことへのイメージがもちやすいものと考えた。

さらに、活動を毎日繰り返して行うことで、子どもたちが見通しをもって自分の活動に取り組むことができるように総計800株をプレゼントするようにしたが、岐阜大学農学部附属農場（植物生産部門）の協力を得て、その確保を図った。

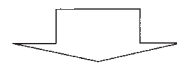
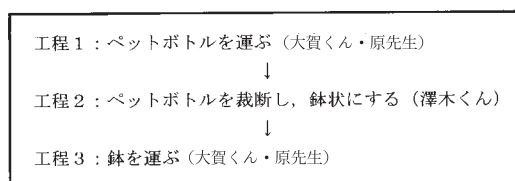
5 工程の分け方・組み方

前年度の牛乳パックを用いた活動を基に、子ども一人ひとりのできることをさらに高めることができるようにと検討した結果、ペットボトルを切断し、花鉢を作ることも活動として取り入れることにした。

工程は大まかに図3に示したとおりであるが、工程Ⅰ：植え付け準備と工程Ⅱ：苗の植え付けにと分けられる。また、工程Ⅰの活動は、次回の工程Ⅱのための花鉢作りをしており、工程Ⅱの活動が授業の始めから思う存分取り組めるよう、また活動の終わりの見通しがもてるよう予め用意しておくようにした。

これらの活動で、子ども一人ひとりが仲間と

工程Ⅰ（鉢作り）



工程Ⅱ（花苗移植）

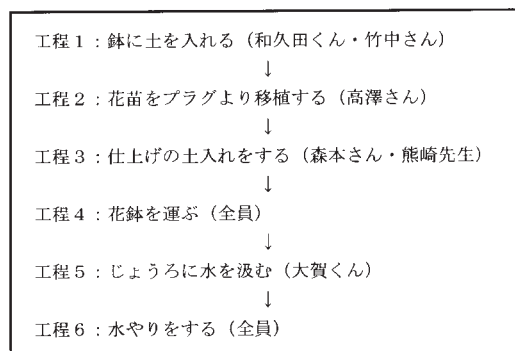


図3 単元「お花プレゼント大作戦」の作業工程

ともに活動することで、自分の役割の大切さを知り、さらに自分で判断して仕事に取り組んだり、仲間に働きかけたりして、精一杯最後まで取り組む姿を期待した。

子どもたちの「できること」や「できそうなこと」を取り入れ、子どもたちがよい姿で取り組める工程を設けることで、「できる状況づくり」に努め、「支援の最適化」を図った。こうしたことから、仲間と一緒に取り組む流れ作業として作業工程を組み、子どもたち一人ひとりが作業工程の一工程を担うことで、仲間からの励ましなどの声かけから張り切ったり、仲間や先生と必要に応じてやりとりをしたり、自分の1つ前の工程の仲間に働きかけたりする子どもたちの姿がよく見られ、よりよい「できる状況づくり」が行えたものと判断された。

6 展開の流し方・仕事の流し方

対象単元期間中の10月22日に実施した授業研究会の授業展開は表2に示したとおりである。花苗の移植を始めて3週間目となり、この時点で子どもたちは約400個の花苗の移植を完成していた。作業手順も分かり、慣れた様子でそれぞれが担当した工程に取り組んでいた。

授業研究会では、教材・教具や作業量、作業

表2 単元「お花プレゼント大作戦」の授業展開例 (x年10月22日)

		澤木くん (6年生)	大賀くん (5年生)	和久田くん (5年生)	竹中さん (5年生)	高澤さん (5年生)	森本さん (6年生)
願う児童の姿		・30本分のペットボトルの切断と鉢づくりに取り組む。	・原先生と一緒にかごを使ってペットボトルを運ぶ。	・D子と一緒に最後の鉢まで土入れをする。	・自分のペースで土入れの活動に取り組み続ける。	・土入れの友達を応援しながら、最後の鉢までの移植をていねいに行う。	・熊崎先生の声かけで、鉢に土を入れることができる。
支援の手がかり	思いや願い	・ニクロム線に触らないように気をつけてたくさんのペットボトルを切りたい。	・先生と一緒に活動したい。	・友達とかかわりながら活動したい。 ・プレゼントする友達に喜んで欲しい。	・自分の仕事に自分で取り組みたい。 ・教師や友達に働きかけたい。	・友達のために、たくさんの花苗を植え替えたい。	・自分の好きなことをしたい。
	分かること	・繰り返し行っている活動であれば、自分から取りかかることができる。	・声をかけたり手を添えたりすることで、これからする活動に取りかかることができる。	・一つのことを持続して取り組むことは難しいがみんなの中で活動することができる。 ・友達が喜んでくれることがうれしい。	・自分で取り組めるような道具を用意すれば、進んで活動を行うことができる。 ・教師の反応を楽しみにして働きかける。	・活動に見通しがもてると目標に向かって集中して取り組むことができる。 ・友達が喜んでくれることがうれしい。 ・友達の手伝いや励ましの声かけができる。	・教師の働きかけに応じて行動することができる。
作業内容		ペットボトルの切断	ペットボトルの運搬	土入れ	土入れ	苗の移植	仕上げの土入れ
活動	配慮事項	個別の活動 (・) と教師の支援 (→)					
<ul style="list-style-type: none"> 今日はどのクラスの友達にプレゼントするために取り組むか知る。 それぞれの役割で花の移植活動を行う。 	<p>今から取り組む活動がより勢いづくように声をかけ合ってから活動を始める。</p> <p>それぞれの取り組みの様子を適宜他の児童にも知らせる。</p> <p>次回の活動につながるようにそれぞれのがんばりを教師が紹介するようにする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ニクロム線を使ってペットボトルを切る。 ・切ったペットボトルを合わせて鉢を作る。 <p>→澤木くんからの働きかけには、できるだけ速く対応するようにする。また、ニクロム線の交換は、熊崎先生が行う。</p> <p>→鉢を作ることができたら、大賀くんに声をかけるように促す。</p> <p>→電源が切っているなどの安全確認をする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・原先生と一緒にかごを使ってペットボトルを澤木くんの所に運ぶ。澤木くんが作った鉢を廊下の棚にしまう。 ・ペットボトルのじょうろに水を入れて運ぶ。 <p>→ペットボトルを運ぶ時に声をかけて促す。原先生も同じ仕事を担当する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本時取り組む学級分のペットボトルの鉢に土を入れる。 <p>→参観者の方に気が取られ、活動への取り組みが難しくなると思われるが、一緒に活動する友達やプレゼントする友達のことを話しながら、できるだけ自分の仕事に戻るように促す。</p> <p>→土を適量入れることができたり、土入れに集中して取り組むことができたりした時には、花が育ちやすくなることを伝え、十分に認め、励ますようにする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本時取り組む学級分のペットボトルの鉢に土を入れる。 <p>→活動により意欲的に取り組むことができるように、様子に合わせて励ましなどの声かけをする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・和久田くん、竹中さんが土を入れた鉢に花苗を移植する。 <p>→移植しやすいように土や苗の状態を整えておくようにする。それでも、移植しにくい苗があった時には、手で優しく運ぶことを伝える。一人で言うことができた時には、充分にほめる。</p> <p>→友達に促す言葉がけや友達のがんばりを認める言葉が聞かれたときには、取り上げ、ほめる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・熊崎先生が渡した花苗移植後の鉢に土を入れる。 <p>→土を入れる時や入れる場所を適宜、示したり手を添えたりして支援するようにする。</p> <p>→長い時間安定して活動できるように椅子を用意する。</p> <p>→体調が思わしくなく、活動に取り組むことが難しい時は、熊崎先生が介助する。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・移植した花苗にみんな水やりをする。そして、次回にプレゼントする学級について確認する。 							

工程・作業場が、子どもたちがそれぞれ役割をもち、仲間とともに、繰り返し活動できるように設定されていることから、見通しをもって自分から精一杯活動できていたこと、活動を時間で区切るのではなく、41個達成したら終わるという子どもたちができたと思える授業の流れを組んでいること、活動日の次の日にプレゼントするような単元計画になっていることで、子どもたちがそれを目指してがんばっていたことが成果として挙げられた。そして、教師側が、子どもたちのできる姿を当然と受け止めず、これからさらに子どもたち一人ひとりの姿を認め、声かけを心がけていくことが今後の検討課題として指摘された。

7 道具・補助具の工夫

① ペットボトルカッター

花鉢作りの全行程を子どもたちの活動とするため、ペットボトルの切断も検討を加えた。ペットボトルを半分に切断する道具をインターネットやこれまでの教育資料などで調べたが、市販されているペットボトルカッターやはさみ類、さらに、徳島教育センターが教具として開発している電熱線によるペットボトルを切断する器具などがあった。市販のカッターやはさみを購入し実際にペットボトルを切断してみたが、1つを切るのに思いのほか時間がかかったり、まっすぐに切るのが難しかったり、切り口がギザギザになって触ると危ないなどの課題が新たに生じた。また、紹介されていた切断機はその機器自体を作ることが工学系の知識がないと制作が難しいうえに、材料が入手しにくく、さらに、

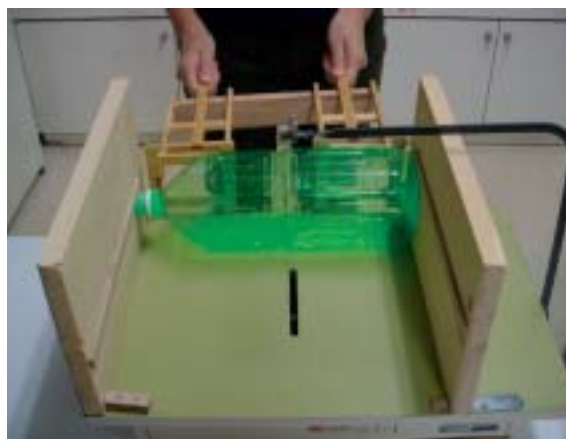


写真1 ペットボトルカッター

800個ものペットボトル切断に耐えうる物なのか分からなかった。

こうした状況をから自作のペットボトルカッターを制作することになった。徳島教育センターの切断機からヒントを得て、学校にもある発泡スチロールカッターを利用できないかと考えた。実際にペットボトルを切ってみると、ペットボトル1本が約1分で切れ、切り口も熱で溶けながら切れるので、丸くなって触っても大丈夫であるということが分かった。しかし、ニクロム線（電熱線）が300℃になることへの安全対策や切断面が容易に直線になるようにするため、補助板を取り付けるなどの試作を行い、写真1のようなペットボトルを押す補助具を作成した。材料はイーゼル型スタンド2基、木材バラ、丸釘、フェルトで、スムーズに動くよう下部の接触面にフェルトを取り付けた。また、ペットボトルを花鉢として活用するには、上から11cmのところまで切る必要があった。そのため、写真1のように、道具本体の左右に板を付けて、ペットボトルをその間にはめ込むことで、全て同じ位置で切断できるようにした。さらに、ペットボトルが浮かんでズレない工夫として、ペットボトルのキャップ口と底部の道しるべとなるようなレール用板を取り付けた。

このときにペットボトルを倒した状態で、幅の広い方から切るか狭い方から切るかについても検討を加え、ペットボトルの幅広の方から切る方がペットボトルがつかみやすく、押しやすく、切る時間も多少短いことが分かった。さらに、安全面に配慮して、ペットボトルを押す道具が、ペットボトルを切り終わり押しきったところで止まるように止め具を付けた。このとき、ペットボトルは押しきって向こう側へ落ちることが必要だったため、ペットボトルの形を考慮した小さな止め具を付けた。材料として、SPF材、木材バラ、カナオレ、サラ木ねじ、釘、ニクロム線を用いた。

実際に活動が始まりペットボトルカッターを澤木くんが使ってみると、ペットボトルをはめ込む向きや、持ち方など細かい注意点や手順があることが分かった。そこで、澤木くん合った支援を検討し、写真2のような写真入りの手

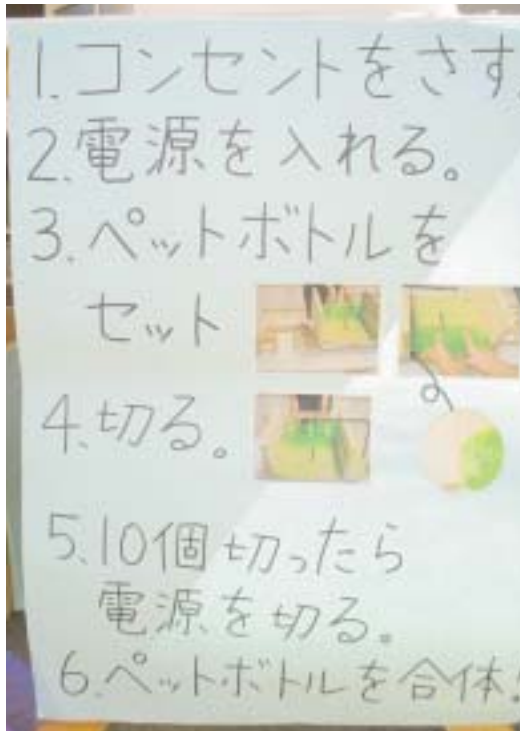


写真2 ペットボトルカットの手順表

順表を作った。そして、項目を1つ1つ声に出して読み上げながら活動を進めることを澤木くんに声かけすることで、初めの頃見られたペットボトルを無理やり押し込むことや、電源スイッチを消し忘れることは全くなかった。

② 土入れ機

土入れを担当する和久田さんと竹中さん、森本さんの土入れの補助具は、前年度同様ゲーディング用鉢入れにじょうごを固定したものに、ペットボトルの大きさに合わせた引き出しを付けた写真3のような補助具を用意した。今回ペットボトルの花鉢が高さ18cmもあるため、木枠の高さも、はめる位置がわかり易く、倒れにくいようにと高くした。また、入れる土の量が多く、ペットボトルによって多少大きさが違うため、外しやすいように木枠の口は大きめに、引き出し全体はやや重めにした。そして、その引き出しが簡単にずれないように左右のレーンも高くし、動かしやすいよう幅にゆとりをもたせた。

花苗づくりで重要なのは土の量であるが、今回用いたペットボトルの花鉢は透明であるため、子どもたち自身が目で見て、入れる土の量を判断することを目的の1つとしたため、めもりや

しるしを付けるなどの特別の支援は行わなかった。ただし、入れる土の量が適量約700ccということで多いため、移植ごての検討も行った。移植ごての形で柄の有無やすくう部分の大きさ、移植ごて全体の大きさや重さなど、子どもたちが扱いやすいものをと、数種類試してみた。軽くて大きさが小さく一度にすくう土の量が少ないと何度も土をすくっては入れなければならず、子どもの理解や声かけが難しいと考えられた。最終的には写真3のような柄付きのすり切り2杯ではほぼ適量となる口の広いものを選んだ。

「できる状況づくり」では、子どもが精一杯活動して、やり遂げることができるような状況づくりが大切となる。そのための手立てはたくさんあるが、名古屋恒彦(2002)と中坪晃一(2002)は、その1つが子どもに合わせた補助具の工夫であるとしている。上記の3人の土入れの活動でも、子どもたちが取り組みばよりよく自分一人でやり遂げられるような土を入れやすくした補助具を作成し、さらに、手助けや声かけなども、子どもたちやその取り組みの様子に合わせて行っていった。こうした手立てから、一人で最後までやり抜く和久田くんや、黙々と自分のペースで取り組む竹中さん、自分から補助具の口に土を入れる森本さんの姿がたくさん見られた。

8 ともに取り組みながらの教師の支援

教師も作業工程の一端を担い、図3や表2に示したように子どもたちとともに活動しながら、子どもたち同士のかかわりを意識した声かけをしたり、必要に応じて手を添えたりするなどの



写真3 土入れ機

支援に努めるようにした。

生活単元学習では、教師の子どもへの支援的対応も、子どもの自発的・自立的活動を促すものとして大切になってくる。このことについて、三田和夫(2002)は『子どもの思いを考慮し、子どもが「自分から」「自分で」活動に取り組むことを支える状況づくりが、教師の子どもへの支援的対応である。また、子どもとともに活動し、成功のよろこびを分かち合うことで、子ども一人ひとりに合った適切な支援もできる』としている。実際の活動では、仕事が終わると先生と「やったー！」と手を打ち合わせて達成のよろこび分かち合ったり、森本さんの隣で同じ工程を分担して行いながら声かけなどをする中で自分から取り組んだりする姿が見られた。

まとめ

今回の実践研究では「できる状況づくり」の検討に努めたが、子どもたちはそれぞれに主体的に精一杯活動に取り組み、最後までやり抜く姿を見せてくれた。こうした「できる状況づくり」を徹底することについて、小出 進(1993)は「子どもたちは、できる状況の中で活動してはじめて主体的に精一杯取り組めるのである。つまり、より良く活動のできる状況の中でこそ、自ら考えて活動する余裕もでき、より上手に、よりたくさんという課題をもって活動する意欲もわくのである」と述べているが、そのことを強く実感することができた。

また、今回の活動を展開していく中で、随所に見られた子どもたちの強い思い、特に仲間を思う気持ちを大切に、それに応えていくことも教師として決して忘れてはならない重要なことだと感じた。

これからも、この単元活動で明らかになった「できる状況づくり」として踏まえるべきことに留意し、子どもの思いを大切に、また生活に即した活動を展開していくことで、子どもとともに充実した豊かな生活を分かち合えるよう取り組んでいきたい。

注 今回取り上げた単元「お花プレゼント大作

戦」での子どもたちの具体的な取り組みの様子は熊崎のぞみ(2004)に報告した。

付記 子どもたちの取り組みの様子や写真などの掲載については保護者の方々の了解を得ました。なお、小学校名と子どもたちの名前は仮名です。

文献

- 小出 進(1993)講座 生活中心教育の方法.学習研究社.
熊崎のぞみ・坂本 裕・杉山貴子(2003)知的障害特殊学級における子どもの主体的活動を中心とした生活単元学習の検討(2). 岐阜大学教育学部障害児教育実践センター年報, 10, 77-86
熊崎のぞみ(2004)仲間と笑顔で精いっぱい頑張る学校生活をめざして. 発達遅れと教育. 550, 13-16.
三田和夫(2002)共に取り組み支える教師. 実践障害児教育. 345, 16.
名古屋恒彦(2002)できる状況づくりとは. 実践障害児教育. 345, 14.
中坪晃一(2002)できる状況を作るには. 実践障害児教育. 345, 15.
小塩允護(2002)就学基準の改正と知的障害教育. 特別支援教育, 7, 16-19.
太田俊己(2001a)知的障害教育担当教員に求められる専門性. 特別支援教育, 3, 17-20.
太田俊己(2001b)概況. 日本知的障害福祉連盟(編) 発達障害白書-2002年版-. 日本文化科学社. 58-59.
太田俊己(2002a)一日・一週間の学校生活. 実践障害児教育. 345, 7-8.
太田 俊己(2002b)単元とは. 実践障害児教育. 345, 10-11.
千葉大学教育学部附属養護学校(2002)実践 生活中心教育 今を主体的に生きるための生活の総合化. 学習研究社.
柘植雅義(2001)特殊学級教育. 日本知的障害福祉連盟(編) 発達障害白書-2002年版-. 日本文化科学社. 60-63.
渡辺健治(1997)特殊学級教育. 日本精神薄弱者福祉連盟(編) 発達障害白書 戦後50年史. 日本文化科学社. 84-102.
吉田昌義(1994)特殊学級教育. 日本精神薄弱者福祉連盟(編) 発達障害白書-1995年版-. 日本文化科

学社. 61-65.